

1. 調査報告概要表

作成日 平成20年8月9日

【評価実施概要】

事業所番号	4791600010
法人名	有限会社MAJUN
事業所名	グループホーム福ら舎
所在地	〒904-0411 恩納村字恩納6322 (電話) 098-966-1771

評価機関名	沖縄県社会福祉協議会
所在地	沖縄県那覇市首里石嶺町4-373-1
訪問調査日	平成20年7月28日

【情報提供票より】(平成20年6月27日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	昭和(平成) 19 年 6 月 1 日
ユニット数	1 ユニット 利用定員数計 9 人
職員数	12 人 常勤7人, 非常勤5人, 常勤換算7.05人

(2) 建物概要

建物構造	鉄筋コンクリート造り 2 階建ての 階 ~ 1 階部分
------	--------------------------------

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	45,000 円	その他の経費(月額)	10,000 円	
敷金	有() (無)			
保証金の有無 (入居一時金含む)	(有) 90,000 円) 無	有りの場合 償却の有無	(有) 無	
食材料費	朝食	250 円	昼食	350 円
	夕食	350 円	おやつ	50 円
	または1日当たり 円			

(4) 利用者の概要(6月27日現在)

利用者人数	9 名	男性	4 名	女性	5 名
要介護1	2 名	要介護2	2 名		
要介護3	2 名	要介護4	2 名		
要介護5	0 名	要支援2	1 名		
年齢	平均 90 歳	最低	75 歳	最高	102 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	恩納クリニック
---------	---------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

当ホームは、緑豊かで閑静な地域に立地し、近隣には村総合福祉保健センターや協力医療機関がある。建物は、築一年の採光の良いバリアフリー住宅で、障害が重くなっても介護負担の軽減が図れるように配慮されている。開所して丁度一年が経ち、入所者及び職員が落ち着いた状況にある。理念は職員全員でつくりあげていったことから、職員は日々理念を確認しながらひとりひとりに寄り添う支援をしている。そのことが利用者の楽しみごとや役割を引き出している。また、看護師の配置があり、協力医療機関との連携が良くとれている。今後は、村内で初めてのグループホームとして、地域住民の方々に対する認知症の理解に向けた啓蒙活動に取り組みられることを期待したい。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	<p>今回が初めての外部評価となる。</p> <p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>評価項目ひとつひとつについて職員全員で自己評価を行っている。評価項目を確認することで、外部評価時点ですでに改善されているものもある(利用者の入浴時間に合わせて勤務表の変更に取り組んだ)。また、自己評価項目にある権利擁護事業や成年後見制度についての学習を深めている。</p>
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	<p>平成20年2月と6月に会議を開催し、現在のところ事業所からの報告が中心になっている。委員からは、「児童会や婦人会の交流を通して地域への理解を図ってみたいはどうか?」との提案がある。管理者は、今後近隣の小学校の児童会及び地区婦人会との交流に仕組み、地域へ向けて認知症の理解を啓蒙していきたいと考えている。</p>
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	<p>ほとんどの利用者に、週に一回程度の面会があり、その機会を通して家族との情報交換は密に行われている。また、面会の少ない利用者の家族には、利用料の明細書送付後に電話で利用者の様子について報告が行われている。職員は家族が要望等を言えるような雰囲気づくりに努めており、家族からの率直な要望を受けてケアに反映させている。</p>
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	<p>現在、保育園や幼稚園との交流を図っている。また、地域祭りや海岸の清掃活動への参加はあるが、自治会に加入していないため自治会主催の行事などには参加していない。開所一年とのこともあり、事業所が地域への理解を深めている状況である。</p>

2. 調査報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	理念をつくりあげる過程で職員が大切にしているキーワードをそれぞれ出し合い、職員全員で納得のいく話し合いで理念をつくりあげている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	職員全員で理念をつくり共有し、日々、業務に入る時には玄関に掲示してある理念を確認する取り組みを行っている。また、管理者は、業務ミーティングでケアの振り返りをしながら理念の共有を図っている。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	現在、保育園や幼稚園との交流を図っている。また、地域祭りや海岸の清掃活動への参加はあるが、自治会に加入していないため自治会主催の行事などには参加してない。開所一年とのこともあり、事業所が地域への理解を深めている状況である。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	評価項目ひとつひとつについて職員全員で自己評価を行っている。評価項目を確認することで、外部評価時点ですでに改善されているものもある(利用者の入浴時間に合わせて勤務表の変更に取り組んだ)。また、自己評価項目にある権利擁護事業や成年後見制度について学習を深めている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	平成20年2月と6月に会議を開催し、現在のところ事業所からの報告が中心になっている。委員からは、「児童会や婦人会の交流を通して地域への理解を図ってみてはどうか？」との提案がある。	○	今後も運営推進会議は、2ヶ月に一回継続して開催されることが求められる。また、会議において外部評価の検討課題について報告するだけでなく、現在取り組んでいる内容についても委員の方々から意見を吸い上げて日々の実践活動に活かされるよう期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	地域包括支援センター職員が在宅訪問をしていた利用者の面会を行ったり、不穏状態が強い利用者について家族との調整に同席してもらうなどして日頃から利用者に関する情報を共有している。ホームの方で対応困難な場面が生じた時には、すぐに対応方法が検討できるように市町村との連携が図られている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族等が面会に来られる時に、利用者の現状をその場で報告している。また、面会の少ない家族等には、利用料の明細書送付後に電話で普段の様子を伝えている。さらに壁にはドライブ等の時に撮った写真を貼り、利用者の暮らしぶりがわかるようにしている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱「希望の声」を設置しているが、これまで投書が一度もみられない。意見等への対応として掲示コーナーを設けている。家族の要望等が言えるような雰囲気づくりに努めており、家族からの率直な要望(車椅子からトイレの便器に乗り移る時にはけがを起こさないように安全な介助をしてほしい等)を受けてケアに反映させている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	この1年間に3人の職員が離職しているが、現在のところ退職を予定している職員はなく、現状では退職や離職による利用者への直接的な影響は見られない。管理者は職員の意向を聴取するように取り組んでいる。	○	職員の退職が見られるときは、早めに家族と利用者に知らせるなど、利用者の心の安定を保てるような配慮が求められる。また、今後退職や異動が見られる時は、利用者の不安の軽減を図るために、一定期間(一ヶ月程度)新旧の職員で同様の勤務体制を敷くなどの工夫が望まれる。
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は月2回の業務ミーティングの中でその時の課題に応じた職員研修を行っている。これまでに権利擁護や成年後見制度等についての勉強会を実施している。一方、外部研修においては年間計画は立てられていない。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は、近隣の同業者と交流しながら他のホームの経験等を運営に活かしているが、沖縄県グループホーム連絡協議会には加入していない。職員は同法人以外の同業者との交流を行っていない。	○	今後は、沖縄県グループホーム連絡会等に参加し、交流・情報交換を行い、そこで管理者や職員が抱える悩みを共有して孤立しないようなバックアップ体制を作られるよう期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	現在在宅から2名、施設などから7名の方が入居している。いずれの利用者においても入居前に事前に家族の方と一緒にホームを見学してもらい、ホームの雰囲気馴染めるようにし、入居後は、家族の面会を多くしてもらったりして利用者本人の不安を和らげる取り組みをしている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は、利用者から方言を覚えてもらうことで利用者との心の交流が図られている。また、季節の行事などは利用者中心に行われており、ムーチャーづくりの工夫を覚えてもらうなど、共に支え合った関係が築かれている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	面会時での会話を通して家族から情報収集し、利用者の対応への工夫につなげている。在宅で生活していた時と同じような生活が送れるように配慮している(これまでに午前10時起床の利用者はホームでも同じようなリズムで過ごしてもらっている)。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	管理者は、計画作成を兼務しており、計画作成にあたり家族から利用者の情報を収集して介護計画に反映させている。また、業務ミーティングの中で介護状況の報告を受けて介護計画を作成している。しかし、家族、看護師を含む職員等が同席したサービス担当者会議は、開催されていない。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	管理者が業務ミーティングや家族面会時に情報を得て介護計画の見直しを行っている。その際には、職員や家族等が参加してのサービス担当者会議が開催されていない。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	利用者の要望に応じた支援により、利用者は暮らしに楽しみを見いだしている(在宅時に利用していた理容店の利用、雑誌の好きな利用者が月2回、リサイクルショップに出向いて雑誌を借りている)。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	一人の利用者は、病院に家族が付き添って受診を継続している。それ以外の利用者は、協力医療機関の医師がかかりつけ医となっている。受診は協力医療機関が近くにあることからホームで対応している。看護師が複数配置され、かかりつけ医との連携が密に行われている。また、かかりつけ医からも利用者の病状把握の照会がある。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	現在の所、重度化や終末期の対応が求められる利用者は見られない。終末期に向けた話し合いは、職員間では行われていない。	○	終末期に関する職員研修や家族との面談などを実施し、今後の終末期に向けた方針を利用者と職員、家族及びかかりつけ医と一緒に一歩一歩作りあげてほしい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者のプライバシーを損ねるような言葉かけが見られる時は、管理者が業務ミーティングで「プライドを保つこと、本人の身になって考える」ことを伝えている。また、個人記録等については、所定の保管場所におかず、記録が居間におかれて利用者が目を通した経験から細心の注意を払い事務室で保管している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	外出願望のある利用者への支援は、管理者や運営者がドライブに連れていっている。利用者の希望に添うよう努め、また、一人一人のペースを大切にしている(利用者には起床時間が午前10時の方がおり、そのペースを保っている)。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	できる限り利用者に献立を考えてもらい、食材の準備(菜園に行って野菜を収穫)、調理の下ごしらえをお願いして職員と一緒に食事作りをしている。食事中に食の進まない利用者他に利用者がご飯を箸ではさんで口にもっていく様子はほほえましい。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	入浴時間等は決めず、利用者の習慣、希望に合わせた日中の入浴支援をしている。入浴を拒否される場合には無理強いせず、しばらく時間をおいたり、翌日に誘ってみたりして入浴を支援している。		
(3)その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	利用者の趣味や特技が活かせるような支援をしている。書道の上手な方に行事のタイトルを書いてもらったり、折り紙の上手な方から職員も教わりながら季節感のある作品を作り、壁に展示してある。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	月1回のロングドライブや買い物を兼ねたドライブ、歩いて100M程度の距離にある村総合福祉保健センターや協力医療機関への散歩は日常的に支援している。		
(4)安心と安全を支える支援					
26	66	運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は鍵をかけずに、夜間のみ防犯のため施錠している。玄関の引き戸にベルが設置されているが、ベルが鳴ればどこに行きたいのか聞いて、本人の希望に添うように支援している。帰宅願望のみられる利用者には、管理者や運営者が車で外出支援を行っている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消防設備は設置されているが、消防署への連絡、消火器の使用方法等についての訓練は行われていない。防災計画を立てて避難訓練を実施するように消防署から指導がある。	○	災害時対応の体制、地域の協力が現場において確かな連携に繋がり、それが結果として利用者の安全を守ることとなる。防災計画を立てて所轄の消防署に提出し、早急な避難訓練の実施が望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食食事量を確認しており、利用者のおおよその栄養摂取量を把握している。利用者の状況に応じてきざみ食で対応している。水分摂取量のチェックは体調不良時に行っている。現在のところ食事制限の利用者は見られない。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間はゆったりとして広い窓から光が差し込み明るい。壁には季節や行事に合わせた飾り付けがされている。利用者は好みの場所でその方だけの場所を作っている。廊下の壁面は透き通し硝子で出来ており道路や木々が見渡せて、居ながらにして季節を感じる事が出来る。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベットと木製のダンスはホームで予め準備されている。ホームでは、自宅での部屋と同じようにこれまで使用していた家具や馴染みの物の持ち込みを勧めている。居室には馴染みの服が複数着壁にかけられており、その人らしい雰囲気を醸し出している。		